

# 悪魔の英語術

黒田 莉々

Kuroda Lily

インターナショナル新書 108

## はじめに

「英語が話せると得をするの?」

英語を教えているとよく受ける質問です。「得」の定義によりますが、英語が話せると、体験できる世界が何倍にも広がることは確かです。英語を話す人々は、地球上に15億人もいると言われています。それに対して日本語の話者は、おおよそ1億2~3千万人くらいだそうです。英語の世界は、単純に日本語の世界と比較して、10倍以上も大きいことになります。情報量や種類がそれだけ多く、人脈も大きく膨らむでしょう。英語を学習して世界を広げると、その分チャンスも大きく広がると期待できるため、英語を操れるようになりたいと思う人が多いわけです。2020年からは小学校で英語の授業が必修科目となりました。これからも英語力は必須技能という認識がますます強くなってゆく一方でしょう。

しかし、英語の世界には、日本人にとっては予想外であったり、不思議に思えたりする言動がたくさん飛び交っていて、驚かされることがあります。いわゆるカルチャーショックというものです。このカルチャーショックが生まれる理由を知ることで、英語の世界に近づくことができるのではないかと考えました。

アメリカをはじめとする広大な英語の世界には、日本とはまったく異なる価値観が存在しています。人の価値観は、その国や地域の文化や生活様式、宗教、そして幼いころから教え込まれる道徳観などにより形成され、それがダイレクトに言動に反映されます。

英語学習の濃度や海外経験の有無にかかわらず、誰しも一度や二度は外国人とコミュニケーションを取ったことや、もしくは取ろうとしたことがあると思います。本書を手に取った方であれば、英語の習得、外国人とのコミュニケーションに、少なからず興味があるはずです。そんな皆さんには、外国人とのコミュニケーションで、彼らの言動やリアクションに驚いたことはないでしょうか。

## とある採用面接にて

私は何年か前に、ある日本人ミュージシャンの通訳として、アメリカのルイジアナ州ニューオリンズへ行きました。数日間にわたる現地ミュージシャンたちとのレコーディングイベントだったのですが、始まってみると想定以上の雑務が発生し、困った主催者が、<sup>きゆうきょ</sup>急遽「日本語を話せるバイト」を現地募集すると言いました。人づての口コミ急募であったにもかかわらず、思ったよりたくさん（といっても5人ほどですが）の応募がありました。日本語が話せてしかもヒマ

な人って意外といるもんだなと思いつつ、採用面接に臨んだ私は、そこでアメリカ人の恐るべき性根を目の当たりにしたのです。

“So, you speak Japanese?”

(日本語が話せるんですよね)

そう面接で切り出すと、全員がほぼ同様の返答をしました。

“Sure, I know Japanese! SUSHI, TERIYAKI,  
SAKE.....”

(ええ、日本語なら知っていますよ！　スシでしょ、テリヤキでしょ、それにサケ……)

皆がこのように、ジャパニーズなモノの名前を列挙したのです。ある人はフジヤマ、ゲイシャ、また別の人にはマンガ、カワイイなどなど。1人だけ「コニチワ～！ オハヨゴゼマス」と言えた人がいたくらいです。それなら私はすでに10ヵ国語以上ペラペラだよ、とすっかり呆れてしまったのですが、背に腹は代えられず、その中から、「コニチワ～」と頭一つ抜きん出た日本語運用力を見せてくれたおじさんと、タトゥーの量が他の人より若干控えめな若者、というマシそうな2人を採用することになりました。

ふてぶてしいにもほどがある……。このエピソードに、きっと読者の皆さんも、そのときの私同様に呆れているのではないかと思います。しかし、これは私に

とってはとてもよい意味でのカルチャーショックで、アメリカ人的マインドとも言うべき、彼ら独特の思考回路を目の当たりにする貴重な経験になりました。考えてみてください。彼らは雇われたのですよ。お仕事GETです。もし彼らが、「ああ、僕は『スシ』とか『サケ』とかそんな単語しか知らないし、これじゃとうてい日本語を話せるとは言えないな。だからこの仕事に応募するなんておこがましいよな」と「謙虚」に考え、応募を「遠慮」していたなら、この仕事をGETできる確率は、間違いなく0%だったのです。「二度と会わないであろう日本人（私）にふてぶてしいヤツと思われること」と「効率よく稼げるおいしい仕事をGETすること」、この2つを天秤にかけると、前者なんて屁でもないってことです。もっと言えば、仮に私に毎日会うことがあったとしても、私がどう思うかなんて彼らはまったく気にもしないでしょう。そもそも、ふてぶてしいことをしたという感覚すらないかもしれません。欲しいものを手に入れるために必要な行動をする。シンプルにそれだけなのです。

この出来事が起きた街・ニューオリンズは、The Big Easy というニックネームで親しまれています。大都会ニューヨークが The Big Apple と呼ばれていることに対抗し、ニューオリンズの人々の“Take it easy!”（のんびり行こうよ）というおおらかな気質を反映して

付けられた愛称だそうです。何ごとに対しても easy-going (のんびり) で、あまり深刻に捉えずのんきに構える人が多いニューオリンズだからこそ、あのような出来事が起きたのかなとも思います。同じアメリカでも、The Big Apple、ニューヨークのような大都会では、もっと競争も激しく情報も多いでしょうから、戦略もおのずと違ってくるかもしれません。日本語を使う仕事の面接となれば、付け焼き刃のようにでも日本語のフレーズをいくつか覚えて面接に臨むとか、日本語はできないけどその分しっかり仕事しますとアピールするとか、ニューヨーカーはもうちょっと説得力のある別のアプローチでやってきそうな気がします。しかし、やり方こそ違えども、合理性を重視し、主張すべきことは遠慮せずに主張し、他人がどう思うかよりも自分自身の考えを優先する、という根底にある物事の考え方と同じです。アメリカ人には、そういうアメリカ人特有のマインドが根付いているのです。

## おりこうさん英語

ニューオリンズでの出来事を機に、私は改めて、それまで漠然と受け入れてきたアメリカ人の不思議な言動や習性を思い返して考えました。なぜ見知らぬ相手にでもあんなに人懐っこく話しかけるんだろう。なぜ裸足で外を歩いて恥ずかしくないんだろう。なぜ臆せ

すにものを言えるんだろう。理由はシンプル。それが彼らには「普通」だからです。そして、それが私たち日本人にとって「不思議」に思えるのは、それが「普通」とは受け取れない、つまり私たち日本人のマインドが、彼らとは異なる価値観をもとにできあがっているからです。

英語はコミュニケーションのツールです。そしてコミュニケーションとは、心のうちにあることを、文字や話し言葉で表現し、相手との共通認識としてやりとりする行為であり、つまり、そこには話者の心の中=マインドが反映されます。アメリカ人と英語でコミュニケーションしようとするのであれば、彼らのマインドを知ったうえで言葉を受け取れば、表面的な言葉の意味以上に、より的確にその意図を理解することができるでしょう。また伝える側としても、彼らのマインドを踏まえて表現すれば、相手が難なく受け取れる自然なコミュニケーションになるはずです。

日本には世界に誇れる日本独特の美德があります。人を敬い、ものを大切に扱う。でしゃばらず寡黙である。人に迷惑を掛けない。我慢する。私たち日本人は、幼いころからこういったことを美德として教えられて育ちます。それが日本人のマインドです。日本語には、相手を敬う表現方法が、丁寧語、尊敬語、謙譲語と3種類もあり、私たちは日々それを駆使して人と接して

います。日本人は、概して「おりこうさん」なのです。日本人の「おりこうさん」を基準に考えると、アメリカ人の大胆さや合理的なものの考え方は対極に近いマインドだと言えます。ちょっと「悪魔」的にすら思えます。英語でコミュニケーションをするとき、日本人が身にまとっている「おりこうさん」な部分を思い切って削ぎ落とし、そこに少々「悪魔」的に感じるアメリカ的なマインドを取り入れてみようというのが『悪魔の英語術』の趣旨です。誤解を招かないように補足しますが、アメリカで大学生活を送った私にとって、アメリカは第二の故郷と言っても過言ではなく、母国日本に次いで好きな国です。友人もたくさんいます。アメリカ人のことを邪惡な悪魔だと思っているわけではありません。「悪魔の英語術」というネーミングは、良い意味で明るく自由なアメリカ人のマインドを積極的に取り入れ、英語を理解するヒントとし、そして表現を磨こうという考え方から来ています。

本書は、ちょっと悪魔的な架空のキャラクターであるアメリカ人 Lily (リリー) さんの視点で「悪魔の英語術」を指南します。自由奔放でフレンドリーだけど強気ではっきりものを言う彼女と、英語を学習中のまじめな日本人会社員のヤマトという「おりこうさん」代表のキャラクターを通じ、マインドの違いを浮き彫りにしつつ、英語を学習するうえでのおりこうさんの

削ぎ落とし方、アメリカ的マインドの取り入れ方を具体的に紹介します。悪魔的なスパイスの効いたLilyさんの解説や、彼女とヤマトとの対話を通してご紹介する「悪魔の英語術」が、少しでも英語習得の近道となり、気負わず英語を楽しむきっかけとなれば幸いです。

## 目次

はじめに	3
とある採用面接にて／おりこうさん英語	
第1章	
脱・おりこうさん英語	15
新しい同僚はアメリカ人	
悪魔のささやき1 言うべきことは遠慮なく言おう	
悪魔のささやき2 自分ファーストでいい	
悪魔のささやき3 他人の目を気にしすぎるな	
悪魔のささやき4 うれしい言葉には素直に感謝	
悪魔のささやき5 Noと言えるフェアな関係を築こう	
悪魔のささやき6 恥ずかしさは自意識過剰かも	
第2章	
言語は文化。英語社会の	
文化を映画から学ぶ	85
映画で出会う魅力的な悪魔たち	
【他者の美学を認めつつ自分の美学を貫く】	
『プラダを着た悪魔』	
【野望達成のための努力に必要な悪魔的思考を学ぶ】	
『セッション』	

【ぶれない信念を失わない】『フェノミナン』  
【はみ出すことよりもトライすらしないことのほうが問題】  
『リトル・ミス・サンシャイン』  
【目的へと突き進む強さをもつ】『レオン』

人種差別という悪魔

White Saviorという悪魔

第3章

## リモート時代の英語術

167

挨拶や社交辞令は必要最小限に  
謙遜や遠慮は不要  
人の話は「聴く」に徹する  
わからないのにわかったふりをしない  
自分の意見をきちんと述べる  
オンラインでの実用コミュニケーション英語  
オンライン会議のフレーズまとめ

第4章

## 言語は生き物。柔軟に付き合おう 191

近年の英語事情

COVID-19時代の新英語  
ポリティカル・コレクトネス  
新しい人称代名詞

## 第5章

# 説得力と交渉力、 そして Go your own way

211

「悪魔の英語術」を実践しよう

Persuasion=説得力

Negotiation=交渉力

説得力を磨く

話の組み立て方

交渉力を磨く

マインドの根底にあるもの

おわりに

250

## 第1章

---

# 脱・おりこうさん英語



日本人が英語を話す際、相手を思って丁寧に述べたつもりが、アメリカ人にとっては奇妙なものとして受け取られてしまいがちです。

その原因にあるマインドの違いを、日本人会社員のヤマトとアメリカからやってきたLilyさんの会話から学びましょう。

## 新しい同僚はアメリカ人

日本人にとって、英語は簡単にマスターできる言語ではありません。日本語とは成り立ちや発展の経緯はもとより、文字自体も発音のルールもまったく異なり、文法も違います。文法が似ている言語を話す人々や、ルーツが同じ言語を母語とする人々と比較すると、日本人が英語を習得するハンデは大きいと言えます。英文法、単語やイディオム、リスニング、発音……、英語習得のために取り組むべき課題は広く深く多岐にわたります。しかも、文法や、単語、イディオムを覚えれば、たちまち英語が操れるというわけでもありません。言語そのものだけではなく、なぜそのような表現をするのか、なぜ返答がそうなるのか、そういった話者のマインドを理解していないと、自然な表現にならないことがあるのです。ではどうすればよいでしょうか？まずは、英語を話す世界と、そこにいる人のマインドを知るとよいでしょう。

本書では、若い日本人会社員のヤマトと彼のアメリカ人の同僚Lilyという2人のキャラクターのやりとりから、自然な英語を表現するためのマインドを探っていこうと思います。ヤマトは、真面目で礼儀正しい典型的な「おりこうさん」タイプの日本人青年です。一

方、アメリカ人らしく明るく陽気なLilyは、躊躇したり物おじしたりすることなくハッキリものを言うタイプで、彼女の言動からは、一般的な日本人とは違う大胆さや強さが感じられます。英語が好きで熱心に勉強を続けているヤマトですが、日本で生まれ育ち、日本人マインドで物事を考える彼は、どうしても日本語から英語へと直訳しがちです。どのような発想の転換をすれば、うまく英語表現のポイントをつかめるでしょうか。アメリカ的なマインドを知ることによって、彼が英語を話すときの発想にどのような変化があるでしょうか。

ヤマトとLilyは架空のキャラクターです。ヤマトは日本、Lilyはアメリカという違った文化を背景に育ってきた人物として描いています。日本人とアメリカ人のマインドは、それぞれのステレオタイプでは語り切れないものではありますが、本書では、その違いをわかりやすく浮き彫りにするために、2人の性格を少し典型的に強調して描いています。あくまでも、英語表現をする際の発想のヒントをわかりやすくするためであり、どちらのマインドがよい悪いという比較や評価をしているものではありません。

では、2人の日常を覗いてみましょう。

**商社に勤務して1年目のヤマトは、英語が好きで学**

生時代から熱心に勉強しています。そんなヤマトのチームに、初めてアメリカ人の同僚が赴任して来ることになりました。その情報を知って以来、ヤマトはオンライン英会話などでいっそう熱心に英語の勉強に励んでいます。ニューヨーク支社からやってくるLilyという女性は、ヤマトより2年先輩にあたります。英語はもちろんですが、お父さんが日本人ということで日本語も堪能です。ヤマトは、一緒に仕事をしながら、彼女から英語を学べればいいなと思い、彼女の着任に先立って挨拶のメールを送ることにしました。英語でメールを書くにあたり、まずは下書きを用意しました。先輩なので、失礼にならないよう文例集を参考に気を付けて書きました。

Lily様

日差しがずいぶん夏らしくなって参りました。  
いかがお過ごしでしょう。お忙しいところ、お邪魔して申し訳ありません。はじめてメールを差し上げます。ご無礼のほど、なにとぞご容赦ください。

私は、来月から同じチームでお仕事をさせていただくヤマトと申します。Lilyさんより2年後輩です。英語が堪能なLilyさんのもとで一緒に働けることをとても楽しみしております。

英語がまったくできないので、色々とご迷惑をおかけすることになるかもしれません、機会があれば英語を教えて頂ければありがたいです。今はへたで恥ずかしいのですが、これから勉強していきたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

「よし！これを英語に直すぞ」そう思ったヤマトですが、文法や言い回しが間違っていないか心配になって自信が持てず、翻訳ソフトの助けも借りて以下のように記しました。

Dear Ms. Lily,  
The sunshine has become much more like summer. How are you doing? I'm sorry to bother you when you're busy. I am sending you an email for the first time. Please forgive me for being rude. My name is Yamato and I will be working with you from next month. I'm two years behind you. I am looking forward to work with Lily-san, who is fluent in English. I can't speak English at all, so it may cause a lot of trouble and inconveniences, but I would appreciate it if you could teach me English if

you have the opportunity. I'm not good at it and it's embarrassing, but I will study English very hard from now. Thank you very much.

Sincerely yours,

Yamato

Lilyさんからは、“Thank you! I am looking forward to working with you, too.”と返信がありました。ヤマトが送ったこのメール文については、後でLilyさんから軽くダメ出しを食らうことになるのですが、その話はまた後でします。Lilyさんから返信をもらい、すっかり気をよくしたヤマトは、Lilyさんの着任日までしっかり英語の自己紹介を練習しました。

当日、隣の席に着いたLilyさんにヤマトは、さっそく自己紹介しました。

ヤマト：Hello, Ms. Lily-san. How do you do? (こんにちは、リリーさん、ごきげんいかがでしょう)  
My name is Yamato. Nice to meet you. (私の名前はヤマトです。よろしくです)

Lily：I'm Lily. Pleasure to meet you, too, Yamato.  
(Lilyです。こちらこそよろしく)

ヤマト：My English is not very good. So, please teach me. (英語がへたなので教えてください)

Lily : You are doing fine. But I'll be happy to help you anytime. (問題ないと思うけど、いつでも喜んでお手伝いしますよ)

ヤマト : If you don't mind, please check my English emails. (よければ、英文メールをチェックしてください)

Lily : No problem. Anytime. (もちろん。いつでもどうぞ)

ヤマト : I'm so sorry. (すみません)

Lily : What are you sorry for? (何を謝ってるの?)

ヤマト : Well, my English is not good. So, I'm sorry. (英語がへたなので、すみません)

Lily : You don't have to apologize. Your English is very good. (謝らなくてもいいのに。英語とてもお上手だわ)

ヤマト : No, no, no. あ～もう無理。やっぱり全然まだまだですよ。すみません。

Lily : ヤマト、謝る必要などないのに謝ってる。

ヤマト : あ……。

Lily : 日本人はよく謝るわね。アメリカ人には、「落ち度が見当たらないのに謝っている。なぜだろう」って、不思議に思えててしまうこともあるのよね。

ヤマト : なるほど。

Lily：謝るときも「すみません」だけど、人に声を掛けるときも日本語では「すみません」と言うでしょ。本来これは、英語で言うと注意を促すフレーズのExcuse me.で、謝罪の言葉I'm sorry.とは違う。でも、日本人はそれを英語でI'm sorry.と言うことが多いと思う。もし、迷惑をかけて申し訳ないと感じて謝っているのなら、とても心優しいと思うけど。

ヤマト：確かにI'm sorry.って言っちゃってる。Lilyさんがおっしゃるように、迷惑をかけて申し訳ない……というニュアンスをもっているからI'm sorry.に自然になっちゃうのかもしれない。そして、感覚的にも、謝ることが癖のようになってるのかな。

Lily：ホント。日本人はみんな控えめで、優しいわ。

ヤマト：僕ら日本人って、子どものころから「おりこうさんにしなさい」って言われて育つもんですから。

Lily：おりこうさん？ ああ、Good boy, Good girl. ね。そういえば、もう1つ不思議なことがあるの。

ヤマト：何ですか？

Lily：日本人は優しいから、相手の話に合わせてくれると思ってたんだけど、あなたは、私が褒<sup>ほ</sup>め

めても、自分は英語がヘタだって言って絶対譲らない。なぜそういうところだけ頑固なの?

ヤマト:え? そう言わわれれば、謙遜することが沁みついているのかもしれませんですね。

Lily:ケンソン?

ヤマト:ええ。謙遜は、自分の技量や能力をひけらかさない、つまり自慢しないようにする表現です。日本的な表現と言えると思います。

### メールで謙遜は不要?

Lily:なるほど。ヤマトはケンソンしてるのね。それもおりこうさんの礼儀なのね。難しいな。

ヤマト:ですよね。謙讓というのもありますよ。

Lily:ケンジョー? えっと、なんだっけ?

ヤマト:謙讓は、自分のことをわざわざ低く表現することで、対比として相手の立ち位置を上げるという敬語です。

Lily:ああ、そういえば、赴任前にヤマトが送って来てくれたメール、あれがそうよね。正直びっくりしたわ。ケンソンとケンジョーの言葉がいっぱい。

ヤマト:あーっ! そうかもしれない。Lilyさん、あのメール読んで僕のこと変なやつって思ったんですか?

Lily：私はある程度日本人とお付き合いがあるから、日本人的な表現だってわかったわ。でも、謙遜や謙譲が日本の文化だと知らなければ、「この人は自分に自信のない人か、自己肯定感が低い人なのかな?」と思ってしまうかもしれないわね。

ヤマト：えーっ、まじですか！

Lily：特にビジネスにおいては、悪くすると不必要に相手を優位に立たせてしまう可能性もあるから、こういう英語表現はちょっと注意が必要ね。

ヤマト：ああ、すみません。

Lily：また、謝ってる。別に悪いことをしたわけじゃないのだから、謝る必要などないのよ。今後、英語でメールするときの参考になるようアドバイスするね。

ヤマト：お願いします。

Lily：たとえば私に送ってくれたメールなら、こういうふうに書くとよりいいわ。

Dear Ms. Lily,  
The sunshine has become much more like summer. How are you doing? I'm sorry to bother you when you're busy. I am sending you

an email for the first time. Please forgive me for being rude. My name is Yamato and I will be working with you from next month. I'm two years behind you. I am looking forward to working with Lily-san you. who is fluent in English. I can't speak English at all, so it may cause a lot of trouble and inconveniences, but I am learning English and I would appreciate it if you could teach help me with my English. if you have the opportunity. I'm not good at it and it's embarrassing, but I will study English very hard from now. Thank you very much.

Sincerely yours,

Yamato

ヤマト：うわ、やばい。ほとんど全部ダメ出しされてる。

Lily：別にダメってことじゃないのよ。よく見て。消したのは、要するにケンソンの部分。つまりあなたからの社交辞令でしょ？ メールの要点は「一緒に仕事をすることへの歓迎」だから、厳密には関係ないことだわ。だから要らないの。後輩だということもたぶんケンジョーの意味を込めて書いたかもしれないけど、

先輩後輩って、アメリカでは日本ほど重要なことじゃないので、わざわざ書く必要はないわ。

ヤマト：でもこうなると、事実を述べただけで味気なくないですか？

Lily：味気？ 私が消したところは味気なの？

ヤマト：え？ えーっと、まあ、そう言われば、味気というか、うーん、やっぱ僕の謙遜と謙譲ってことになるか。

Lily：でしょ？ 最初の季節の挨拶は日本の手紙のマナーね。あっても悪いわけじゃないけど、アメリカには特にそんな慣習はないから、まったく関係のない話に思える。そしてあとは、ケンソンとケンジョーでしょ？

ヤマト：ええ。相手へのリスペクトのつもりなんですが……。

Lily：私に言わせると、ケンソンとケンジョーは、書き手が自分自身のために書いていることで、読み手には一切どうでもいいことだわ。どうせなら読み手に関係のあることを書いたほうがよっぽどいいと思うな。

ヤマト：キツイな……。

Lily：まあちょっとキツイ言い方に聞こえるかもしれないけど、特にビジネスの場の英語では、

ケンソンやケンジョーの表現は、「書くのもムダ」「読むのもムダ」ってこと。

ヤマト：ム、ムダ!? わあ、Lilyさん、悪魔みたいな人だな。あ、すみません。失礼なことを。

Lily：謝らなくていいわよ。ある意味その通りだもの。言いたいことを率直に表現する私たちアメリカ人のマインドは、日本人から見ると、少々細やかさに欠けて、少々傲慢でキツイと感じるのかもしれないわね。まさに悪魔的に映るのもわかるわ。でも逆にアメリカ人からすると、日本人のそのオブラートに包んだような対応こそ、何を考えているのかわからなくてちょっと不気味にも思えるときがあるのよ。

ヤマト：なるほど、そうなんだ。

Lily：これだけの乖離<sup>かいり</sup>があるんだから、日本語の表現をそのまま英語に直訳しても、アメリカ人のシンプルなマインドにはちゃんと伝わらないことがあるんだと思う。逆も然り。

### おりこうさんを削ぎ落とそう

ヤマト：おっしゃることはわかるんですが、でもやっぱりアメリカ的な率直でストレートな言い方って、僕たちは慣れてないからなかなかできないです。

Lily：難しい？ やはりギャップが大きいわよね。

ヤマト：そうですね。

Lily：ということは、英語で会話するときは、日本人の感覚からするとちょっと大胆で悪魔的なと思うくらいの表現がちょうどいいのかもしれないわね。

ヤマト：悪魔的な表現ってよくわからないですよ。

Lily：じゃあ、悪魔の私が「悪魔の英語術」を教えてあげる。

ヤマト：悪魔の……英語術？

Lily：そう、ヤマト、あなたは礼儀正しい日本人の典型的なおりこうさん。でもそのおりこうさんの日本人マインドのままで英語を表現しちゃうと、アメリカ人には真意が伝わらず、誤解される可能性があるわ。英語を話すときには少しそのおりこうさんを削ぎ落としてみるといいんじゃないかなって思うの。

ヤマト：おりこうさんを削ぎ落とす？ そしてそこに、僕たちにとってはちょっと奔放で悪魔的にすら感じるアメリカ的なマインドを取り入れる？

Lily：そう。あなたにとって悪魔的に思えるマインドを取り入れて、それを英語にする。きっと自然な英語表現になるわよ。アメリカ的な感

覚ってやつ。Have an American Mind!

ヤマト：American Mind...。悪魔っぽい感覚を取り入れるってことか。

Lily：おりこうさんであればあるほど、きっと楽しい体験になると思うわ。

私たち日本人の多くが日本文化の中で育ち、日本の道徳観を常識として生活に反映していると思うので、知らず知らずのうちに、ヤマトのような「おりこうさん」タイプになっているのではないかと思います。ふだんの何気ない言動を振り返ってみて、思い当たることはないでしょうか。

以下のシチュエーションで、自分ならどうするか、それぞれ反応や受け答えを直感で想像してみてください。自分自身のおりこうさん度が測れるのではないでしょうか。

1. 友人に1万円貸しています。「明日返すね」と言ったのに、すでに1週間が経過。今、その友人が目の前にやってきました。あなたはどうしますか？
2. オフィスの室内温度が少々不快です（暑すぎる／寒すぎるなど）。他の人は普通に仕事をしています。あなたはどうしますか？

3. 「ご自由にお取りください」というメモがついた箱に、おいしそうなケーキが入っています。周りでは上司や先輩や同僚が仕事中。残りは1個。あなたはどうしますか？
4. 先輩から身内のことを持ち込まれました（カレシ超かっこいいね、奥さん美人ね、お子さん優秀ね、などなど）。あなたはなんと返答しますか？
5. 仕事（勉強）を終えて帰ろうとすると、上司（先輩）に、まだ仕事（勉強）が残っているから手伝ってと言われました。あなたはどうしますか？
6. 討論会に参加しないかと誘われました。イベントでの討論会で謝礼も出ます。あなたなら参加しますか？

それぞれの国には文化の違いや宗教観などに培われた国民性がありますが、ものの考え方には個人差もあります。良し悪しも一概には言えませんが、まずは、それぞれの状況での一般的に見られそうなアメリカ人の反応を参考にしながら、おりこうさんの削ぎ落とし方と、プラスすべき、よい意味での悪魔的思考の組み

立て方を考えていきましょう。ヤマトとLilyのやりとりからそれぞれのシチュエーションでのマインドの持ち方を解説します。

**悪魔の英語術**  
**黒田莉々・著**

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）  
定 價：968 円 (10% 税込)  
発売日：2022 年 10 月 7 日  
I S B N：978-4-7976-8108-6

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)